

夢に殉ず^上

曾野綾子

Sono Ayako



人間らしく生きるとは

ペガサスの国からやってきた
天馬翔に託して描く
魂の自由を追求した
人間讃歌の傑作

朝日新聞社

夢に殉ず

曾野綾子

夢に殉ず^{ゆめ じゆん} 上

一九九四年十月一日 第一刷発行
一九九四年十月二十日 第二刷発行

著者 曾野綾子

発行者 天羽直之

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地五-三-二

電話 〇三-三五四五-〇二三一(代表)

編集・書籍第一編集室 販売・出版営業部

振替 〇〇100771730

印刷所 大日本印刷

製本所 清美堂製本

© Sono Ayako 1994

Printed in Japan

ISBN4-02-256741-4

定価はカバーに表示してあります

夢に殉ず

上

目次

夜の報告

7

通告

30

オジャ

57

背後の物音

80

花の影

107

雉の里

136

その人の名前	取引	熊の穴	密約	初対面	星空
301	274	250	225	207	176

装画 藤田龍児

「オーイ野良大ヤーイ」より
装幀 菊地信義

夢に殉ず
上

夜の報告

明倫大学教授・中沖忠彦はその師走の夜、十一時過ぎにタクシーで目黒区平町の自宅に帰って来た。

三年前に、妻の朱美あづみにどうしても強力に言い張られて建て替えた家の玄関に、いつもの通り明かりが灯っていた。玄関のポーチ脇の一つ、玄関の内部の一つ。玄関とリビングの一部に、無理して二階までの吹き抜けの空間を取ったので、内側の明かりは、大きく延びた縦長の窓まで浮かび上がっていた。しかし門から玄関まではたった三歩しかなかった。百五十平方メートルほどの土地に、百二十平方メートルちよつとの家が建っている。親娘三人だけなのだから、狭いと文句を言うことはないのだが、忠彦の専門の英文学の本がかなりあって、十畳ほどの面積が完全に書庫としてとられているのが辛い点であった。

朱美は普段から宵っ張りだが、忠彦は、自分の帰りが遅くて食事もらえないような時には、妻には先に休むように言っている。妻が寝ているか起きているか、を微妙に示すものは、その

吹き抜けのガラス窓に洩れる明かりの量であった。リビングの奥にダイニング。それから鉤の手になって台所があるのだが、その一部に「主婦コーナー」とでもいうべきカウンターがある。朱美はよくそこで、日記や家計簿をつけたり、贈られて来た品物に対する礼状を書いたり、年賀状の宛名書きをしたり、新聞の切り抜きをスクラップしたり、写真立てを銀磨きで磨いたりしている。そういう夜には、外部から見える灯火が、ほんの僅かだが、明るさを増しているのがわかるのである。

車を降りる前に、忠彦はズボンのポケットに入っている玄関の鍵を取り出していた。しかし時々妻は、忠彦の帰って来る気配を敏感に聞きつけて、彼が鍵を差し込まないうちに、ドアを開けることがある。夜半近くのタクシーでの帰宅は思いのほか騒々しいものだから、今夜も朱美はわかっていたらしく、「お帰りなさい」とドアの内側から声があった。

「ただいま」

声でなりと、相手を確かめないうちにドアを開けてはいけない、と言ってある。

「夕香は？」

鍵を閉めながら、忠彦は妻に尋ねた。

玄関脇の駐車場に赤い車はなかったのだから、娘がまだ帰っていないことはわかっていた。

「今日はお友達と出かけることになってるから、十二時近くにはなるわよ、って言ってたわ」

「でかけりゃ、少しは酒を飲んだらうに、車なんか持ってて大丈夫なのかな」

「いっしょに行った足田君が、全くお酒飲めないんですって。だから帰りは、足田君が車ごとうちまで送ってくれる約束なんですって」

朱美はそれから心もち改まった表情になった。

「それより、あなたに報告しときたいことがあったから、起きて待ってたの」

朱美は夫の忠彦より五つ年下の四十三歳であった。小柄で二重瞼の派手な顔立ちをしているから、宝塚に入ったら、娘役・お姫さま役にうってつけだったろう。今夜のように、紺のスラックスに自分で編んだ真つ赤なアンゴラのセーターを着たりしていると、角度によってはまだ三十代にしか見えない瞬間もあった。

「何があったの？」

忠彦はいつも未来に恐れを抱いていた。だから、改まった話などされるといって、反射的に嫌な予感に対して構えている。

「凄く、いい話」

「何だ」

「夕香が昨日、電話で、木戸^{きど}青志^{せいじ}さんから、或ることを言われたんだって」

「何て」

木戸青志というのは、娘の通っている神田大学の一年上級で、夕香と同じ「温泉同好会」のメンバーだと聞いている。木戸家は、青志の祖父の代から、東京、京都、有馬など何カ所かでホテルを経営していた。

『ほんとに君は、就職決めるつもり？』って木戸さんが電話で聞いて来たんですって。だから夕香が、『こっちが決めるんじゃないわよ。パパが同級生にお願ひして、できの悪い娘ですけど、何とか雑用に使ってもらえないかな、給料なんかどうでもいいから、って頼んでくれて、

向こうがいいよ、って言うてくれたら、働かしてもらおうと思ってるのよ』って言ったんですって。そしたら、『君の就職、僕が面倒みちゃいけないかな』って言ったって言うのよね」

「木戸さんこのホテルで使ってくれるの？」

「夕香もそう聞いたんですって。そしたら、『永久就職はどう？』って言ったって言うのよ。

その後で夕香が、『木戸さんの言うてることは何だろうね、ママ』って言うから……」

「そりゃ、普通に考えると、結婚の申し込みだろう」

「でしょう？ 私もそう言ったのよ。でも、あんまり大きなお話だから、万が一、早とちりしてたりすると、恥かきよね。そしたら明日、夕香が木戸さんに会って、直接聞くって言うのよ。『あのお話はこういうことですか？ ほんとに雇ってくださるんですか？ 永久って言うけど、いくら何でも定年はあるんでしょう？ 肩叩きをされないで、定年まで置いてくださるんだったらありがたい、と思いますけど、お宅のホテルの定年は何歳ですか？』って聞くって言うのよ」

「それでいいんじゃないかね」

忠彦は手を洗い、自分で冷蔵庫の中から缶ビールを取り出して来ると、初めてゆっくりと食卓の端に坐ったが、ほんとうはもう一度立ち上がって、自分でビール用のグラスを持って来るべきかどうか考えていた。

本音を言うと、学生がやるようにこのままよく冷えたアルミ缶に口をつけて一息に飲みたい気分であった。アルミは電力エネルギーの塊とも言えるべきもので、地球資源の乱用だそうだが、アルミ缶というものは実によくできている、というのが忠彦の実感である。仮にビールの容器

が、鉄製でも銅製でも錫製でも、こんな安定した気分で、じかに口をつける気にはならないのではないかと思う。

朱美は、普段は忠彦が缶から直接ビールを飲んだりするのを許さなかった。野外でもないのに、グラスを使わないのはだらしない、と言う。生真面目な女なのだろうが、朱美は実に多くのことにルールを持っていて、自分や家族がそれに違反すると、苦しむのであった。

朱美は自分から缶ビールを買うことはなかった。ビールは瓶詰がおいしいに決まっている、と信じていたからである。だから、重くて扱いに少々不便でも、ビールくらい瓶で買うのが当然だ。もう一つの理由は、ここ数年、朱美が急に熱心な環境保護熱に取りつかれたからであった。省エネ・リサイクルの意識は、今や良識ある生活者の当然とるべき態度で、いくら便利だからと言っても、アルミ缶を愛用するような神経は許せない、というのである。だからこの缶ビールも、買ったものではなく、贈答品として贈られて来たものに違いなかった。

朱美が今日は、娘がホテルのオーナーの息子に求婚されたことに興奮して、心ここにないらしいのを幸い、忠彦はそのまま缶を開けて、最初の一口を生き返る思いで飲んだ。

「今日は、どうでした？　いつものメンバーは皆さん集まったの？」

「ああ、骨董屋ちやうや以外は全部来た」

高校時代に同級だった仲間が、四、五人、全く違った仕事に就くようになった。弁護士、医者、広告代理業、編集者、造り酒屋、それにおもしろいことに骨董屋が一人いる。その男は初め、海上火災保険会社に入っただが、どうしても組織人間として生きられない、と自覚して、三十代の後半になって、道楽が生かせる商売に変わったのである。

その中の松山雅夫という弁護士の事務所で、忠彦は娘の夕香を使ってもらおうと頼み込んでいたのだったが、木戸青志との結婚が現実になるなら、そんな計画も白紙に戻さなければならぬ。

「でも、もし木戸さんとの話がほんものだったら、って思ったら、私、今日午後、いろいろ考えて、少し気分が悪くなっちゃった」

「娘が結婚しそうだからって、別に気分まで悪くすることもないだろう」

忠彦は朱美に言った。

「けっこうな話じゃないか。皆に羨ましがられる種類のことだろう。それとも、あの木戸という人には何か、問題があるの？」

何しろ「温泉同好会」の仲間である。初めて話を聞いた時、忠彦でさえ、ふざけた「同好会」だと思った。明倫大学では聞いたこともないクラブである。女子学生と温泉に行つて混浴をする口実を作るためとしか思えない。朱美は、言語道断だといひ、初めはそんなグループには、決して入つてはいけぬ、とヒステリックになつたくらいである。

しかしよく聞いてみると、メンバー二十人のうち、温泉旅館の経営者の息子・娘が六人、温泉町の土産物屋の娘が三人、漢方で皮膚炎が得意という薬屋の息子が一人、みんな温泉関連産業の家の子供たちである。そうでないメンバーの中には、温泉を治療法にもつと利用できないか考へたい、諸外国の温泉の運営方法を調べたい、温泉の民話や歴史の研究をしたい、といろいろな目的を持ったのがいる。そのグループで、木戸青志はリーダー格の青年だと聞いていた。「別に悪評を聞いてるわけじゃないけど、あちらさんとうちじゃ、比べものにならないでし

よ」

「比べる必要はないんじゃないか」

「でも結婚式の時、木戸家が呼ぶお客と、うちが呼ぶお客の、人数とか顔触れとかどうしても、比較されちゃうじゃないの」

「別に競うこともないだろう。あつちは商売柄、派手な付き合いもあるだろう。学者の世界だったら、向こうより私の方が知人が多いというだけだ」

「それに支度のこともあるわ。サラリーマンと結婚するんだったら、洋服も着物も、ほとんどいらないのよ。作ったって着てくところがないくらいですもの。」

でも木戸さんのうちだったたら、そうじゃないでしょう。その日からお付き合いがあるから。宝石はどうなのかしらね。指輪でもイヤリングでも、ちゃんと世間で通る程度のものをお持ちください、って言われたら、あなた、どうするの？」

その要求に応じられない忠彦への、それは明らかに非難の調子がこめられていた。

「僕は言われた時に考えることにするよ」

忠彦は言った。

「どれだけののか、そんなこと、わかりもしないうちから、考えることもないだろう」

「それに親族だって、こっちは貧弱でしょう。あなたは一人息子だし、私の方は……」

忠彦は妻の顔が、まだらに赤くなったのを見た。

「私、どんなことがあっても、あの翔兄^{トウ}さんだけにだけは、式には出てもらいたくないのよ。あの
人……」

「別に遠ざけるほどの人じゃないと思うけどね」

「嫌よ、あの人だけは困るの。あの人、親族紹介の時、一体何て言って紹介したらいいのよ」
妻の兄、というのは、厳密に言えば、妻の腹違いの兄で、天馬翔（てんましょう）という名前であった。娘の夕香が、

「うちの伯父さんに天馬翔っていう人、いるんだよ。変わった名前でしょう」

と言うと、聞いていた友達が、

「漫画の主人公みたいだね」

と反応したのを、忠彦は隣室から聞いていたことがある。この頃の若い連中は、大学生でも教養がないから、天馬と言え、ペガサスのことじゃないか、とすぐに連想できないのである。ギリシア神話では、ペガサスの出生の経緯は、決して明るものではない。ペガサスは、ペルセウスに退治されたメドゥサの死体から生まれたことになっている。このメドゥサは、髪の毛の一本一本が生きた蛇で、その顔を見たものは、恐怖のために石になった、とされている怪物である。

天馬翔の出生の経緯には、ペガサスほどではないにしても、多少の因縁話めいた要素もある。もともと心臓に欠陥があった母の信子は、出産を契機に、産後の肥立ちが回復しないまま亡くなったのである。生母が翔を見ていられたのは、子供が満一歳半くらいになるまでであった。

翔の父の天馬蒼太郎（そうたろう）は、その父の代から、多摩川丸子橋近くの、今の巨人軍の練習場とあまり離れていない土地に温室を作り、一時はかなり大きくカーネーションを作っていた。当時、その辺りにはカーネーション栽培の園芸農家が集まっていたので、土地の人たちは、温室村と